

上村 忠郎（うえむら・ちゅうろう）

1、プロフィール

俳人。高校卒業後「青年俳句」を起し全国的に名を馳せる。その後、「北鈴」の編集人、「たかなな」編集長を務める。八戸を含めた県南の俳壇に残した足跡は大きい。

<生没>

昭和9(1934)年4月9日～平成10年(1998)年9月10日

<代表作>

私家版句集『草の花』(昭和44)。

句集『貌』(昭和58)。

他にコラム集『千本槍・花筏』(平成9)。遺句集『梨花月夜』遺稿集『鯨の秋』(ともに平成16)がある。

<青森との関わり>

南津軽郡浪岡町に生まれ、少年時代を津軽の西海岸地方で過ごす。八戸高校を卒業後、八戸を拠点として活躍。

2、作家解説

昭和9(1939)年、青森県南津軽郡浪岡町大釈迦(現在は青森市大釈迦)に生まれる。旧国鉄職員であった父の転勤により県内を移動。岩崎中学校2年生の時、「毎日中学生新聞」の文芸欄の佳作に〈雪踏みの子に郵便の荷が届き〉の句が入選。俳句の道に進むきっかけとなる。昭和28年、青森県立八戸高校卒業。29年、同人雑誌「青年俳句」を編集発行。「青年俳句」は、寺山修司の「牧羊神」と並び全国的にも有数のものであった。寺山修司も最初加わっていた同誌は、33年に24号で終刊となる。32年、「デーリー東北新聞社」に入社。整理部に長く籍を置く。34年、八戸俳壇に競いあっていた、「すすき野」「北地」それに「青年俳句」を一つにまとめて、しゅらが「北鈴」を起こした時、その手腕を買われて編集人となる。以

後 25 年間、終刊まで支える。その間、44 年に二男が事故死するという痛恨事がある。それまでの 20 年間に作られた俳句より百句を選び、「吾子の霊に捧ぐ」として限定版『草の花』を出す。その後、58 年に句集『貌』を上梓。哀歎に満ちた優れた句集であり、俳人協会の新人賞候補に挙げられた。あまりに上手すぎ新人らしからぬため、受賞を逃したという話がある。一時、小林康治創刊の「林」に参加。小林の死による「林」終刊後、平成5(1993)年に「たかんな」を起した藤木俱子氏に編集長として迎えられ、後に副主宰となる。

俳句はもちろんだが、文章をよくした忠郎氏は、デーリー東北新聞社での最後の 10 年、論説委員として「天鐘」という一面のコラムを担当した。週に5日、全部で 2300 本以上を書いたという。平成9年に出版されたコラム集『千本槍・花筏』は、中から 130 本を選んで一冊としたものである。定年を迎えた7年の7月、いよいよ俳句一本に打ち込んで行こうとしたところで、脳梗塞に倒れる。10 年、死去。16 年、夫人の意思により、遺句集『梨花月夜』、遺稿集『鯨の秋』が刊行される。